油斷して立山の方はかこまず、成政纔の近習計を召具し、忍びやかに城を出て、雪深く埋みたる立山の絶頂へ、雪の上を眞一文字にかけ登り、又絶頂より南をさし、谷嶺をいとはず雪の上をすべり落ければ、信州松本へ落付たり、それより濱松に越えて恙なく、救ひを得たりとなり、雪中に立山を眞直に越たる艱難、中々言葉につくすべからず、其越たる跡を成政がさら〳〵越といひて、只今にも勇氣の者は、越中富山より信州松本へ一二日が間に越る事なり、されど是は法度の事なりとて、其さら〳〵越の所は、彼地の人も秘するといへり、常の道を廻りて行ば、富山より松本へ六七十里にも餘れる所を、一日か二日の間に行道なり、此事只寒中より早春の間にすべき事にて、常の時はなりがたしとぞ、其子細は人跡絶たる極深山のことなれば、草木生ひ茂りて、行べき道をさへぎり、あるひは斷岸絶壁の所ありて、羽なければ飛がたく、あるひは猛獸出て人を食ふ、數十丈の雪積る時には、斷岸絶壁の所も皆一面の雪と成り、たとへころび落たるにも、雪の上なれば其身損ずる事なし、又大樹喬木といへども、皆雪に埋れて一面の平地の如し、猛獸又皆逃隱れて穴に住めば、人を害することなし、此ゆゑに寒氣に堪へ忍びて命全ければ、谷嶺池川の差別なく、眞直に越えらるゝことなり、此事を越中にてくはしく聞しかど、あまりけしからぬ事ゆゑ、只昔物語のやうに聞流して居たりしが、それよりだん〳〵出羽奥州に入て、見るに聞くに、立山のさら〳〵越の事、初て誠の事と思ひ悟りぬ、津輕領の青森といふ所の南に當りて、甲田山といへる高山あり、其峰參差として、指を立たるが如くなれば、土俗八ツ甲田といふ、叡山愛宕抔のごとき山を、三ツも五ツも重ね上たるが如き高山也、津輕領の人勇氣たくましき者、又は罪を得てすがたをかくす時抔、津輕の關所、南部の關所ともに拔んとするに、極月より二月三月の頃までは、此甲田山の絶頂をさして、雪の上を眞一文字に登り、磁石を立て南部地は東南の事と志し、其方角のあたる方をさして、眞直にすべり落る事なりとぞ、常なみの本道を廻り行時は、五十